

精神保健福祉センター等における薬物依存症者をもつ家族に対する心理教育プログラムの開発と効果評価

新潟医療福祉大学社会福祉学科・近藤あゆみ
原宿カウンセリングセンター・高橋郁絵
筑波大学医学医療系・森田展彰

【背景】

薬物依存症対策において家族支援は極めて重要であり、欧米では様々な家族介入方法が開発され、効果をあげている¹⁾。一方、わが国の家族支援は、質量ともに不十分な状況が続いており²⁾、医療保健機関等が実施している家族心理教育プログラムも、様々な家族のニーズを十分満たしているとはいえなかった³⁾。そこで、家族の多様なニーズに対応できる心理教育プログラム（以下、プログラムと記す）の開発を目指すことを目的とした研究を開始した。これまで8種類のテキストを作成し、全国の医療保健機関への普及を進めている。

今回は、平成22年度に作成した4種類の教材（「薬物依存症とは」「上手なコミュニケーションで本人を治療につなげる」「長期的な回復を支え、再発・再使用に備える」「家族のセルフケア」）を用いて、理解度及び有効性等を検討するためのアンケート調査を実施したので、その結果を報告する。

【方法】

精神保健福祉センター8機関と精神科病院2機関の家族教室を利用する延べ415名の家族を対象に、職員がプログラムを実施した後、自記式のアンケート調査への協力を依頼した（新潟医療福祉大学倫理審査委員会の承認済み）。

【結果】

対象者に同一人物が複数回含まれている可能性があるため、家族や薬物依存症者本人（以下、本人と記す）に関するデータは、「薬物依存症とは」のプログラム実施後アンケートに回答した対象者（116名）のみに絞って分析を行った。家族は50～60代（68.1%）、女性（76.7%）、親（86.2%）が多かった。また、継続的に支援を受けるようになってから5年未満の割合（56.1%）が高く、1年未満も23.3%存在した。精神的健康度（GHQ28）の評価では56.9%が神経症群に弁別された。本人は20～30代（74.8%）、男性（85.3%）が多く、未だ断薬に至らない者や刑務所や医療機関に入所中の者が合わせて53.5%と多かった。現在の家族と本人との関係性は、一緒に暮らしていたり、離れて暮らしているものの頻りに連絡を取り合ったりしている者の割合が合わせて64.7%と高かった。

プログラムの理解度については、教材ごとの差は認められず、全体で見ると、「かなり理解できた」または「完全に理解できた」と回答した者の割合は52.3%にとどまっていた。ま

た、「離れて暮らしているが頻りに連絡を取り合う群」の理解度が最も低く、「離れて暮らしておりあまり（まったく）連絡を取り合わない群」の理解度が最も高いなど、家族と本人との関係性によって、理解度に有意な差が認められた（Pearsonのカイ2乗検定、 $p < 0.001$ ）。

有効性についても、教材ごとの差は認められず、全体で見ると、70.4%の家族が「かなり役に立つ」または「非常に役に立つ」と回答していた。しかし、精神的健康度（GHQ28）による差が認められ、「神経症群」は「健常群」に比べて有効であると感ずる者の割合が有意に低かった（Pearsonのカイ2乗検定、 $p = 0.013$ ）。

【考察】

家族と本人の関係性や薬物使用状況に関する分析結果からは、薬物問題が継続している本人の身近で生活しながら心身ともに疲弊する親の姿が、対象者の特徴として浮上した。

プログラムの理解度については、「理解良好群」は5割程度であり、一度の参加では十分な理解を得ることは難しいことが示唆された。プログラムを実施する機関は、同じ種類の教材を用いたプログラムに繰り返し参加できる環境を家族に提供することが望ましい。有効性については、「有効群」が7割を占め、一定の有効性が確認できた。精神的健康度や本人との関係性によって、プログラムに対する理解度や有効性が低くなってしまふ家族が存在するため、個別の評価や支援を忘れてはならない。

【結論】

医療保健機関の依存症家族教室参加者を対象にアンケート調査を実施したところ、プログラムの有効性は確認できたものの、理解度については課題が残り、繰り返し学習することの必要性が示唆された。今後は、十分な理解が得られない家族の特徴を明らかにするとともに、新たな教材を増やし、プログラムの完成を目指したい。

【文献】

- 1) Copello AG, Velleman RD, Templeton LJ. Family interventions in the treatment of alcohol and drug problems. *Drug Alcohol Rev.* 2005; 24(4):369-85.
- 2) 森田 展彰, 成瀬 暢也, 吉岡 幸子, 西川 京子, 岡崎 直人, 辻本 俊之. 家族からみた薬物関連問題の相談・援助における課題とニーズ. *日本アルコール関連問題学会雑誌.* 2010; 12: 141-148.
- 3) 近藤あゆみ. 薬物依存症者の家族がもつ多様なニーズを満たすための家族心理教育プログラムの開発に関する研究—薬物依存症者をもつ家族の支援を行う関係機関職員を対象とした調査結果から—. *社会福祉の可能性. 新潟医療福祉大学社会福祉学部編集.* 相川書房. 2011; 3-12.